# 保育の体験と思索

## ――子どもの世界の探究（三十）――

津守　真

### 五歳児の秋

五歳児の二学期になると、すでに半数の子どもは六歳になっている。多くの子どもは幼稚園の生活に馴れ、自信をもち、遊ぶことがいよいよ面白くなる。よく見ていると、今までになかった成長の姿が見られる。子どもたちの世界は、時間的にも空間的にも、順序や構造ができて、おとなの要請に対応して行動することも容易になる。それでいて子どもたちには独自の子どもの世界がある。

次に掲げるのは、五歳児の二学期に、付属幼稚園で見られた遊びの断片である。このクラスでは、毎日がこういう活動の連続であると言ってよい。一見、他愛のない活動のようであるが、よく見ると五歳の二学期でなければ見られないものである。

### 滑り台に紐をかけて

十月三日

滑り台の上で、男児と女児二人が上部の手すりに紐を結び、それにつかまって登ったりおりたりして遊んでいる。女の子たちは、他の男児にいじめられると、Kちゃんが守ってくれると云っている。Kは真剣な顔をして女の子と話している。ときどきいじめにくる男児たちがいるが、その子たちもふくめて皆楽しそうである。私はこの子たちが三歳だったときに、Kが女の子たちをいやがらせていたことを思い出す。

滑り台の上部の手すりに紐をかけてよじ登ったりおりたり滑りおりたりして遊ぶことは、子どもの発想によるもので、普通にはおとなはこういう遊びはしない。おとなが考えてはじめる遊びは、ままごととか、汽車ごっことか、常識的なまとまりのある活動であることが多い。また、滑り台は上から下に滑りおりる遊具という固定観念がおとなにはあって、紐をかけてよじ登るというようなことはなかなか考えない。ところが子どもはおうちごっこをしていても、一見おうちとは関係のないようなこういう遊びが途中にはさまって、それがおうちごっこを面白くさせているのである。その魅力に誘われて、他の子もやりたくなる。それがいじめにいくような形になるのだが、こうして集団がひろがり、五歳児たちは、集団の遊びを楽しむ。こうした集団遊びは子どもたちによってはじめられ、子どもたちの力によって維持され、子どもたちによって変形されてゆく。私は他の子たちと追いかけっこをしながら、滑り台の遊びを横目でみていたのであるが、自分たちの力で発展する遊びは本当に楽しそうに思えた。このKは三歳のときには、子どもの中にとけこめないことが多く、女の子たちのままごとに入りたくても、投げたりひっくりかえしたりしていやがられることが多かった。それを共通の遊びにつなぎとめるのには、保育者の側の努力を要することが多かった。（七十六巻四号）当然のようなことであるけれども、いまや、子どもたちは自分たちの力で、集団の遊びを面白くしてゆくことができるようになったのである。

Kの真剣な顔は、いかにKが子どもたちのつくり上げている世界の中に入りこんでいるかを示している。他人の眼は意識しない。自分たちの仲間の間の面白さの世界である。こういう集団の遊びは、五歳児の生活にいくらでも見出すことができる。

## 庭の真中に出てゆく

十月十七日

女児mが、ひとりで、バレーのように、床に腹ばいになる恰好をして、何度も床に倒れる。自分では何かのつもりらしいが、外から見ているとおかしくて、つい笑ってしまう。それでもひとりで何度も手をひろげて床に倒れる。私に見向きもせずに、庭の真中に出てゆく。この子の心は何かの空想で一杯になっているのだろう。

mはしばしば白雪姫などになったつもりになって、他の人に、「おばあさんになって」など頼み、おはなしの筋に乗って対話をしてよろこぶ。この日は、手をひろげてポーズをとり、地面に倒れることをひとりで何度も試みている。頭の中で何を空想しているのか分らないが、本気になって空想の世界に入っていることが察せられる。それをみているとついおかしくて笑ってしまう。外からの目をいささかも気にする風はなく、そのものになりきっている姿は、外から見ていても可愛らしくて好ましく思え、笑いを誘われる。mは五歳児にしては少し幼い方であるが、ひとりで堂堂と空想の世界に入って行動しているところが、五歳児としての成長を感じさせる。mは手をひろげたポーズで地面に倒れることをくり返しながら、少しも悪びれることなく庭の真中に出てゆく。幼さを幼さのままに受けいれられてきた保育の成果がここに見られる。

## 順序

男児Nが、野球しようと私のところにくる。私がボールを投げはじめると、忽ち十人くらい集まり、一列に並んでバッターの順番を待つ。一人一人真剣にバットを構えるので、ボールを投げるとき、楽しみな感じがする。私はほとんど一時間くらいボールを投げていた。

球を打ちたいと思えば、一列に並んで順番を待っていると、自分の番がくることをこの子どもたちは分っていて、進んで列をつくる。忽ち十人くらいの列ができる。一人一人の子どもの世界の中に、時間系列の順序ができており、それに支えられて集団の構造ができているといえよう。

同様に製作の過程にも、子どもの世界の順序性（秩序）を見ることができる。Yは折紙の本の蛙の作り方の図解を見て、「かえるのつくりかた教えて」と何度も言う。その折紙の本には、①から⑨までの段階が図解で示してある。少しやってみせると、じき

に⑤の段階までやれるようになり、鶴の作り方のように開いて持ってくる。違っているところを少しやってみせると、あとは自分でやると言ってとってしまう。⑦⑧も同様に、少しやってやるとあとは自分でやると言ってとってしまう。⑨段階で出来上り、一つできると、もう一つ作ろうと言って自分でやりはじめる。じっと指先を見つめながら、きちんとゆかないと何度もやり直し、こんどの方がよくできたと言って見せにくる。折紙を折るという指先の運動世界にも、はじめから終りまでの間に順序段階が成立しているのを見ることができる。

このように、子どもの世界に順序・構造ができてきていることは、この他にも、子どもの生活のいろいろの面に見ることができる。このことを、五歳児の拡大されつつある集団遊びと結び合わせてみると、五歳児の二学期には組織化された集団活動やごっこ遊びを計画することが容易であることを理解することができるように思う。おとなが段階づけた活動の計画に従って活動することのできる素地は、五歳児の二学期には相当にあると言えよう。しかしそのような教師によって構成された活動と子どもの遊びとは根本的に違う点がある。それは後者には子どもが自ら発動する力があるという点である。

## 白紙のノート

### 十月十七日

Uは白い画洋紙を三つに折り、はさみで切り、ホチキスでとめ白いノートを作る。一人が作ると次々に数人の子どもが同じような白いノートを作る。

Kは白い画用紙をはさみで切ってホチキスでとめ、白いノートを作った。何冊も作ってそれを持ち歩いていた。白い紙を切り何もかかないで綴じてノートを作るというのは、このころの子どもの好んで作るもののひとつである。おとなは、もったいないから何かかいたらと言いがちなのであるが、これは白紙のノートであることに意味があるのではないかと思う。

丁度このころに、ある子どもたちは数枚にわたる続きものの描画をかいたり、それにおはなしをつけたりする。こういうことから考えると、何もかかない白紙を重ねてノートを作るとき、子どもの頭の中にはすでに、いろいろの構想が形にならないままに渦を巻いてあるのではなかろうか。白紙のノートは、続きものをか

きこんでゆくことのできる、いろいろの可能性をもった空間である。白紙であるからこそどんなものでもかくことができる。

子どもの遊びの展開を見るときも、同様のことがある。遊びにおいて、次にどういう考えを出してゆくかは、子ども自身に委ねられている。どのような理由であれ、それがきめられていたら、遊びではなくなってしまう。未来は子どもにとっては何もかかれていない白紙のようなものである。現在において、そのような未来をもつことができるとき、子ども自身の内側からイメージが湧き起ってくるであろう。それが次の瞬間の遊びをつくる。

白紙のノートを作って持ち歩いている子どもの姿を見ると、さまざまな可能性をもつ未来が察せられて、何か豊かな気持になる。そこにはいつか、思いもかけない物語りが描かれてゆくであろう。それは時が来て、子ども自身が作り出してゆくものである。

## 矛盾

### 十一月二十三日

私はビニールテープを切って画用紙に貼りながら、子どもと会話する。

男児S「人間て動物なんだよ」
男児H「ほんと？」
動物ならしっぽがあるという話になる。
「豚にはしっぽがあったかなあ？」
「ねこはしっぽがあるよ」
「うちの猫はしっぽがないよ」
「短いのはあるんじゃない？」
「ゴリラはしっぽがないよ」
「ゴリラと人間だけしっぽがないんだ」
話しているうちに人間は動物ではないということになる。

「人間て動物なんだよ」という子どもの設問にはじまり、動物にはしっぽがあるが人間にはしっぽがない、故に人間は動物ではないという言語面の三段論法による結論を導びき出している。その結論は最初の設問と異なっていて、子どもたちは何か腑に落ちない様子であるが、まだそれ以上の議論にはならない。

動物をしっぽによって定義しているが、子どもはだれもそれに異論を唱えない。子どもはしっぽには早くから大きな関心を持っており、布で作ったしっぽをお尻につけてやると、子どもは急に

動物のような原始的なしぐさをして遊びはじめる。後に長くひきずるしっぽは原始性への通路のようである。そして、しっぽをお尻につけてもらうことを喜ぶ。しっぽをとるとまた人間の動作にもどる。人間は動物であるという設問に始まるがそれと矛盾した結論になり、どちらが本当か、腑に落ちないまま子どもたちは散る。

## 五歳児の栄光と憂うつ

五歳児にはいろいろの点で成長の姿がみられる。子ども同士で考えを相互に調節することができるし、遊びも組織化してくる。また、おとなの要請にこたえてゆくことができるので、おとなが計画した組織立った活動を子どもにやらせることが容易になる。このことが、教師にとっては、日日の子どもとの生活を惰性化させ、子どもにとっては、華やかであるはずの活動から不満の原因が作り出される。

次に掲げるのは、五歳児二学期の家庭での記録である。

### メタルを足の下に踏みつける

**十一月八日**

Pはこのごろ幼稚園から帰ると、きげんの悪いことが多い。小さなことですぐにギャーとなく。幼稚園から、毎日、リボンの先に、牛乳びんのふたに模様をかいたメタルを首に下げて帰るが、家に帰るとすぐに、時には帰宅の途上でそれを地面に捨て足で踏みつけてしまう。話をきくと、この数週間、幼稚園ではオリンピックごっこをしている。「オリンピックごっこなんかつまらない」と言う。他のことして遊んだらというと、「ほかにやることないもん」「おままごとなんておもしろくない」「幼稚園なんてつまんない、あたしがやろうと思ってるとおかたづけになる」「それにさ、ほかにはあたしのすることがないんだもん」「幼稚園じゃ、ちょっとでも土を掘ると叱られちゃうの」など話す。

幼稚園では、何週間にもわたって、オリンピックごっこの単元活動が行なわれている。何種目にもわたる運動が用意されていて子どもたちは列を作って順番を待ち、一覧表に○や×をつけ、どの子どもも毎日その表をうめてゆかなければならないらしい。幼稚園では単元活動は順調に行なわれているのだろうが、家に帰ってからの子どもの様子をみると、幼稚園で満足していないことは明らかである。先生は恐らくそのことに気付いていないのだろう

と思われる。このことの三日前に、幼稚園の先生からの報告に、「このごろとてもいい子になったことに驚きます。片づけを率先してどんどんする、並ぶときにも先に立って並びます」とあった。子どもは先生の期待に添うことができるようになったので、先生が計画したことからはずれることができず、無理をしているのだろうと思われる。また、先生はいい子になった側面だけを見て、子どもが自分からはじめた、いたずらのように見える小さな遊びの価値を見落しているのではないかと思う。計画された活動の側から言えば栄光のしるしとも云えるメタルを、子どもは投げ捨てて足の下にふみつける。足の下にふみつけるものは、その人にとって何の価値も認められないものであろう。運動会でも学芸会でも、単元活動でも、先生の側からは栄光と見えることのまさにそのことが、子どもにとっては憂うつのもとになるのである。

おとながある計画をもったとき、その熱意に触発されて、子どもも何かをやりはじめることは多く見られる。そのうちに、子どもは自分から別の面白さを見出して、おとなの考えとは違うことをやりはじめることも多く見るところである。そのときに、おとなが自分の考えを押しすすめることに教育的価値を見出すと、子どもは十分な活動ができなくなってしまう。つまり、おとなが張り切りすぎてはいけないのである。子ども自身の考えが生れ出るだけのゆとりがそこになければならない。おとなにも子どもにも、白紙のノートのような空白の瞬間がなければならない。そして子どもが本気になって取り組む活動は、むしろこれからの後の部分にある。おとなにも子どもにも満足のいくような保育は、ここまで到達できたときであるが、それは大げさなことではなくて、だれでもが身近に体験していることであると思う。ある段階で思い切って自分の考えを捨てて子どもと一緒にダンボールの箱の中に入って過ごしたとき、いつの間にか子どもは自分の遊びをはじめている、その一日の終りに、「きょうは本当に面白かったね」とため息とともに発することばをきくことのできたとき、子どもと半日を共にした保育のよろこびを感じるのである。

学校に上る時を間近に控えた五歳児の秋であるが、この時期は学校への準備のためにあるのではない。幼稚園生活の中でも最も充実した生活をすることのできる時期である。どの子どもも、それぞれ、最も自分らしさを発揮しながら、共通の遊びを作り上げることのできる時期である。

（つづく）